
宮島仁の憂鬱

言峰綺礼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宮島仁の憂鬱

【Nコード】

N4960S

【作者名】

言峰綺礼

【あらすじ】

ちよっと不幸な主人公がいろんなアニメやゲームの世界に行ってしまう短編小説です。

（前書き）

前に書いてみた小説を載せてみようと思いました。

多分大丈夫だとは思いますが、そのうち書き直します…苦情が来たらではお楽しみください。

本来ならあり得ない世界

空想上の物語のはずなのに

なぜか俺は…ここにいた

ここはどこだ？

素直に、しかも最初に思った気持ちこそそれと思うのはどうかと思うが…

しかし、見た感じ全く知らない景色だ。しかし、覚えがないわけでもない。

「冬木市」

なぜ俺はここにいるのだろう。Fateの世界に入り込んでしまったのだろうか。しかし、これは夢なのだろうかと思ってしまう。

もし、夢ならばいつ覚めるのが全く分からない。そんな事を思っている

「あれ？うちの生徒じゃん？こんなところで何サボっているのかな？」

唐突に声をかけられたので振り返ってみるとそこには、タイガがいた。

「むむ？今タイガって聞こえたような？」

実際に会ってみるとその勘が素晴らしく鋭いことに戸惑っていると「早くしないと遅刻しちゃうよ？ほらダッシュダッシュー！」

そう言われ仕方なく学校に行く。その時に自分の服装が士郎の通っている学校の制服を着ていることに気がついた。

そして、学校で席について授業を受けた。なぜか俺がいるという事に違和感がなくこれがいつも通りなのではないかという錯覚さえ覚えてしまう。学校が終わると、なんとなく商店街の方に向かってみた。深い考えもなく、なんとなく骨董店に入り、辺りを見ていると「何かお探でしょうか？」

その声を聞いて振り返ってみるとそこには身長が高く、髪の長さが腰まであり、エプロンをつけて、魔眼殺しの眼鏡をかけているライダーの姿があった。

「あつ、いや…」

何か言おうかと思ったがなかなか言葉が出てこない。それを察してか「何かありましたら、呼んで下さい」

そう言って業務に戻っていく。ただ、去り際の笑顔になぜか恐怖を感じた。こう獲物を見定めるような感じが…だけど正直助かった。そう思った矢先

「あら、あなた…魔術師なのかしら？」

そんな事はない…と思いたい。だが、この人に言い訳は通用しないだろう。

「えっ？えーと…」

どうしよう、上手く言葉が出てこない。

「どうやら貴方、セイバーのマスターと同じ感じがするわね。坊や」やはりキャスターは分かるのだろうか。後輩に言われたことと全く同じことを言われてしまった。

「待ちなさいキャスター。彼は私が先に目を付けました。」
あの目はやはりそういうことだったのか。そう思ったが口には出さず、全力でその場から逃げ出した。

どれだけ走っただろうか。気がつけば、喫茶店の前で力尽きていた。とりあえず、一息入れようと思い、その喫茶店に入った。

「いらっしやい、お？ 見ない顔だな」

入った矢先にその一言を言うのはやはりランサーだった。

まあ仕方ない。ここは何か頼んで速やかに出よう。そう心に決めて、適当に席に座る。だが、その選択を間違えた。

「おや、ここにいましたか。運命とは時に素晴らしいものですね。」
悪魔の声が聞こえたように思えた。後ろを見るとさっきまでキャスターと言いつ争いをしていたライダーがいた。

「えっ：えくと、どうしてここに？」

分かり切っているのについてそんな事を聞いてしまう

「いえ、単にアルバイトが終わっただけですが？」

やはりそうだった。若干思考が停止していたので「となり失礼します」という声を聞きたくなかったがすでに座ってしまい、

「まあここは私が奢ります。」

そう言って二人分のコーヒーとちょっとした軽食をランサーに頼んでいた。「ちよっと待ってな。すぐに持ってくる」そう言って奥の厨房に行ってしまった。

「とりあえず、まずは自己紹介でも。私のことはライダーと呼んで下さい。」

そう笑顔で言ってきた。危機感を感じないので、多分大丈夫だろう。

「えと、俺は宮島仁です。」

そう言った。

「ではヒトシと。良い名前ですね」

自分の名前をほめられて悪い気持ちはしない。そんな事を思っていると

「待たせたな。ほら、コーヒーと軽食持ってきたぞ」

そう言って、机の上に品物を置いて、自身も客席に座った。

「店番の方はいいいんですか？」

心配になりそう聞くと

「まあ客が来たら分かるしな。それに、ライダーと一緒にいる坊主に興味があるしよ」

それを聞いた瞬間、内心ぐったりしていた。ただでさえライダーで困っているのに、そのうえランサーである。もう逃げることはできない。

その後、店が閉店するまで根掘り葉掘り聞かれまくり、心身共に疲弊したが、会計をライダーがしてくれたのは純粹にうれしかった。だが、ここで問題が発生した。いまだに夢から覚めないのである。俺はこの世界の住人になってしまったのであろうか。そんな事を思っている

「せっかいです。夕食と一緒に食べませんか？私が住んでいるシロウの家なら問題はないと思いますが…」

もうどうとでもなれ、そう思いこの申し出を受け入れることにした。

やはり士郎の家というのはすごいなと思ったのが最初の感想だった。ライダーに連れられ玄関に入ると「ただいま戻りました」と言っていたので自分も「お邪魔します」と小さく言った。すると、足音が聞こえ桜が出迎えていた。

「お帰りなさいライダー。あれ、そちらの方は？」

当然の反応である。やはり迷惑だったのではないかそんな事を思っている

「彼はヒトシと言います。今日はいろいろあったので私が誘いました。」

そう言って桜：さんを納得させていた。意外と押しが強いんだななんて思っていると

「桜、どうかしたか？」

そんな事を言いながら玄関に来たのは、家主の衛宮士郎本人だった。彼は俺とライダーを見て、少し考える仕草をした後、俺に向かって「もうじき晩御飯ができるから上がってくれ。大所帯だからうるさいかもしれないけど」とOKサインを出してしまった。

ライダーも「では行きましょう。ヒトシ」と言っさつと居間へ向かっていくので、あわてて士郎さんに「すみません。お邪魔します」と言うと、「まあ今更だから、そんなに気にすることはないさ」と言ってくれた。俺は、ただ苦笑するしかなかった。

そして、このカオスな空間はなぜ出来てしまったのかと思う。最初は良かった。居間に行ったら、凜とイリヤが何か口論していてそこにセイバーが時々口を挟む程度で、自分が知っている光景だった。晩御飯ができて、ちょうど並べ終わった時にタイガが戻ってきて食べ始めは良かった。おかずの取り合い合戦までは良かったんだ。しかし、おかしいな瓶を見つけた時には手遅れだった。みんなが酔ってしまい、自分もまともな思考ができないでいた。そんな時、誰かにぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？ヒトシ」

ライダーだった。しかし、なぜだろう。顔が近い：

「とりあえず、少し血をいただきますね。」

なぜ、今そんな事を言うのだろう。ボケた頭で考えたが答えは出なかった。

「大丈夫です。痛くありませんから」

そんなことは聞いていない。なんとか声を出して理由を聞きたい。

そう思い、言葉を選びながら

「なんで、俺の血がほしいんだ？ライダー」

と聞いた。

その問いに対し、ライダーは少し考える仕草をしてこう答えた。

「貴方は一般人でしょう。しかし、今日出会ってから魔力の流れを確認しました。なので、どこかの魔術師なのではないかと思い、ち

よつと確認をしたかったので、強引ですが、酔っているところを狙っていたわけです。」

つまり、このカオス空間を作った原因がライダーだったとは…

「では失礼します。大丈夫です、痛くありませんから…」

そう言われ、俺は、ライダーに血を吸われた。

という夢を見た。

「っは!!」

辺りを見回すと、いつも寝ている自分の部屋だった。

「夢にしてはずいぶんとカオスな夢だったなあ」

そんな事を思っ、時計を見ると俺の中で時が止まった。大学に行くまで最低50分はかかる。今日の講義は1限からある。時間は8時50分。対して今の時間は8時40分。

「……遅刻だ」

なんということだろう。とりあえず、1限は欠席でもまだ大丈夫だろう。だが、2限の講義は大事だ。そう思いながら、準備をして家を出た。

――大学内――

少し遅れたが、いつものメンバーと合流して世間話をしたり、作業を行い夜帰ろうという雰囲気になった時、メンバーの一人が俺に対してこう言ってきた。

「今日何かあった？」

突然そんなことを言われて少し戸惑いながら

「特に何もないけど…どうしたの？」

すると、少し真面目な顔をして静かに

「だって…仁君。首筋に噛まれた跡があるよ？」

と爆弾を投下されたのであった。

終わり

——おまけ——

俺は恐怖を感じた。あれは夢の出来事ではなかったのか！！一人この状況に混乱していると

「あれじゃね？寝ている間におぜう様に噛まれたとか？」

冗談で話していると友達が

「いや、みやならレミリアよりもライダーじゃない？」

なんていう討論を始めた。てかどんな理由でライダーが出てくるんだよ！しかも当たってるのがちよつと悔しい…

こうして宮島仁の世にも奇妙な一日が終了した。真実を知っているのは、誰もいない。

(後書き)

多分続編書きます。

同じF a t e / s t a y n i g h tで書けたらいいな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4960s/>

宮島仁の憂鬱

2011年10月7日23時35分発行